

# 青年期の友人関係における被異質視不安と異質拒否傾向<sup>1</sup>

—— 青年期における変化と友人関係満足度との関連 ——

高 坂 康 雅\*

本研究の目的は、青年の友人関係における“異質な存在にみられることに対する不安”（被異質視不安）と“異質な存在を拒否する傾向”（異質拒否傾向）について、青年期における変化と、友人関係満足度との関連を明らかにすることであった。中学生 260 名、高校生 212 名、大学生 196 名を対象に、被異質視不安項目、異質拒否傾向項目、友人関係満足度項目について回答を求めた。被異質視不安項目と異質拒否傾向項目をあわせて因子分析を行ったところ、「被異質視不安」と「異質拒否傾向」に相当する因子が抽出された。友人関係満足度を含めて、青年期における変化を検討したところ、異質拒否傾向は変化せず、被異質視不安は減少し、友人関係満足度は高校生女子が低いことが明らかとなった。さらに、異質拒否傾向、被異質視不安、友人関係満足度の関連をパス解析にて検討した結果、女子及び高校生男子において、異質拒否傾向が友人関係満足度を低め、大学生男子以外で、異質拒否傾向が被異質視不安を高め、さらに、高校生女子と大学生男子において、被異質視不安が友人関係満足度を低めていることが明らかとなった。

キーワード：被異質視不安、異質拒否傾向、友人関係満足度、青年期

## 問題と目的

現代青年の友人関係が希薄化していると指摘されて久しく（松井, 1996 ; 岡田, 2007 など）、現代青年が友人と心理的な距離をおき、形だけの表面的なつきあい方をしていることが、いくつかの調査で示されている（野田, 1999 ; 東京都生活文化局, 1985 など）。栗原（1996）は、若者を親密な友人関係をもつ若者と、自他を傷つけず群れていることによる安心感によって成立する自己中心的な友人関係をもつ若者にわけている。また、このような表面的な友人関係であるにもかかわらず、青年はその友人関係から仲間はずれにされることを極度に恐れ、友人に受け入れられ、その友人関係を維持することに、強迫的なまでの努力をしていることも指摘されている（保坂, 1993 ; 千石, 1991 など）。

このような表面的な友人とのつきあい方について、上野・上瀬・松井・福富（1994）は、周囲に同調しやすい青年ほど、他人の視線を気にする傾向が高いことを明らかにしている。また、佐藤（1995）は高校生女子がグループに所属する理由の分析を行い、「浮いた存在に

なることの忌避」因子を抽出している。高田（1989）は、自分が努力しているような姿は友人から「カッコワルイ」と評価されるため、このような姿を友人にみせることを避ける青年について論じている。青年期の友人関係における同質性への圧力（Peer Pressure ; Brown, 1982）の強まりや、仲間と同じであることの重要性に関する指摘（岡村・加藤・八巻, 1995）を踏まえると、友人と表面的なつきあい方をしている青年は、友人から“異質な存在にみられることに対する不安”（以下、被異質視不安）をもっていると考えられる。この被異質視不安があるため、青年は友人から異質な存在としてみられないように、表面的なつきあい方をしていると推察される。

では、なぜ青年は友人から異質にみられることに対して不安を感じるのでしょうか。これについて、青年は“異質な存在を拒否する傾向”（以下、異質拒否傾向）をもっていることが予測される。保坂・岡村（1986）や保坂（1998）は児童期や青年期前期では、同質性を重視した友人関係である gang-group や chum-group がみられることを指摘しており、また榎本（2003）も青年期前期に相当する中学生において同質性を重視する友人関係がみられることを明らかにしている。これらの指摘から、特に青年期前期において、友人関係において同質性を重視しており、そのために自分たちとは異質な友人を拒否しようとする心性が生じることが考えら

\* 和光大学  
東京都町田市金井町 2160  
ykosaka@wako.ac.jp

<sup>1</sup> 本研究の一部は、日本パーソナリティ心理学会第 17 回大会（2008）で発表された。

れる。また、Elkind(1967)は、形式的推論の達成によって生じる、青年が自分のもっている考えや関心は、他者も自分と同程度にもっていると推論してしまう青年期における自己中心性について論じている。これを被異質視不安と異質拒否傾向との関連に置き換えると、青年が異質拒否傾向をもっている、友人も同程度に異質拒否傾向をもっていると推論される。友人が異質拒否傾向をもっていると推論されることによって、友人から異質にみられると拒否されると考え、被異質視不安が生じると推察される。つまり、青年期の自己中心性のために、異質拒否傾向が被異質視不安を生じさせていると考えられる。

これらの議論から、現代青年に特徴的であると論じられている表面的な友人とのつきあい方には、被異質視不安が関わっており、被異質視不安は異質拒否傾向によって引き起こされていると考えられる。被異質視不安と異質拒否傾向は、「異質な者として拒否される—異質な者を拒否する」という受動と能動の関係にあり、これらを通して青年期における友人関係を捉えることが可能であると考えられる。

被異質視不安や異質拒否傾向に関連して、保坂・岡村(1986)や保坂(1998)は、同質性を重視したgang-groupやchum-groupから異質性を重視したpeer-groupに移行すると論じている。また、榎本(2003)は、青年期の友人関係が、高校生を境に、同質性を重視した関係から異質性を重視した関係へと移行すると論じている。さらに、総務庁青少年対策本部(1999)の中学生と高校生を対象とした調査では、「友だちに嫌われないように気をつかうことが多い」や「できればつきあいたくない人がいる」という回答した割合は、男女とも、高校生の方が中学生よりも少なかった。これらから、被異質視不安や異質拒否傾向は、青年期前期ではともに高いが、年齢を経るにつれて、低減するものであると考えられる。

また、石川(2008)は、友だちの目を気にし、浅く広いつきあい方をしている大学生は、親密な関係を求めている大学生よりも、友人関係満足度が低いことを明らかにしている。また、渡部・佐々木(1996)は、児童(小学生)を対象とした研究ではあるが、親しい友人に対して内面的な自己開示が少ない児童の方が、多い児童よりも友人関係満足度が低いことを明らかにしている。内面的な自己開示を行わないような表面的な友人関係の背景に被異質視不安があると仮定すると、被異質視不安が強いと、友人関係満足度は低くなると考えられる。また、異質拒否傾向が被異質視不安を引き起

こしていると推測されることから、異質拒否傾向も友人関係満足度に直接的、あるいは被異質視不安を媒介として間接的に、関わっていると考えられる。そこで、友人関係に関する主観的な指標として友人関係満足度を取り上げ、被異質視不安と異質拒否傾向が友人関係満足度に及ぼす影響を検討する。

以上から、本研究では青年期の友人関係における被異質視不安と異質拒否傾向について、それらの青年期における変化や友人関係満足度との関連について明らかにすることを目的とする。この目的のために、以下の3つの手続きを通して検討する。①被異質視不安と異質拒否傾向という2つの心性を測定する尺度項目を作成する。②被異質視不安と異質拒否傾向の青年期における変化について検討する。この際、友人関係満足度に関する研究は少ないという石川(2008)の指摘も踏まえ、ここでは、友人関係満足度の青年期における変化もあわせて検討する。③被異質視不安及び異質拒否傾向と友人関係満足度との関連を検討する。青年期の友人関係における感情、行動、つきあい方などには、発達差のほかに、性差があることも指摘されている(榎本, 1999; 落合・佐藤, 1996; 杉浦, 2000など)。そこで、②では、学校段階と性別を要因として、青年期における変化について検討する。③では、既述のとおり、異質拒否傾向が被異質視不安を引き起こし、また異質拒否傾向は友人関係満足度に対し直接的、あるいは被異質視不安を媒介にして間接的に、関わっているという予測をもとにモデル(Figure 1)を作成し、モデルを検証する形で、被異質視不安及び異質拒否傾向と友人関係満足度との関連を検討する。

なお、本研究で扱う友人関係は、同性友人との関係に限定した。また、以上の議論をもとに、被異質視不安を「同性友人との関係において友だちから異質な存在としてみられることに対する不安」と定義し、異質拒否傾向を「同性友人との関係において自分とは異質な存在を拒否しようとする傾向」と定義して、研究を行った。

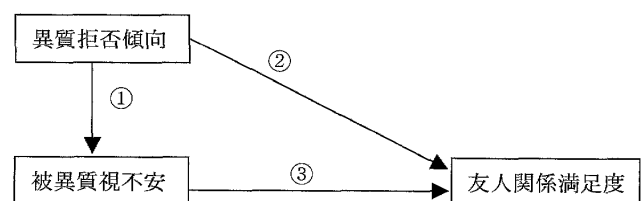


Figure 1 異質拒否傾向、被異質視不安、友人関係満足度の関連モデル

## 方 法

### 調査対象者

A県内の中学1－3年生260名(男子135名, 女子125名; 平均年齢13.68歳, 標準偏差0.90歳), 高校1－3年生212名(男子108名, 女子104名; 平均年齢16.21歳, 標準偏差0.94歳), B県及びC県内の大学生196名(男子64名, 女子132名; 平均年齢20.18歳, 標準偏差1.25歳)を調査対象者とした。

### 調査内容

(1) 被異質視不安項目・異質拒否傾向項目と(2) 友人関係満足度項目で構成された質問紙を用いて調査を行った。

(1) **被異質視不安項目・異質拒否傾向項目**: 被異質視不安項目と異質拒否傾向項目は以下の手続きを通して作成した。まず, 著者が被異質視不安と異質拒否傾向の定義に基づいて, それぞれ15項目ずつ作成した。次に, 心理学を専攻する大学院生20名が, 作成された項目の内容的妥当性(定義に対して項目の内容が妥当であるか)を1「まったく妥当でない」, 2「あまり妥当でない」, 3「どちらともいえない」, 4「ある程度妥当である」, 5「非常に妥当である」の5件法で判定した。また同時に, 倫理的・表現的判断(作成された項目の表現が倫理上及び中学生などが回答する上で適当であるか)を「適当」, 「不適当」の2つの選択肢のどちらかを選ぶ形式で行った。20名の内容的妥当性の評定平均が3.50以上であり, 倫理的・表現的判断において, 1人も「不適当」であると判断しなかった項目を採用した。その結果, 被異質視不安項目12項目, 異質拒否傾向項目13項目を採用した。質問紙では, 被異質視不安項目と異質拒否傾向項目は無作為に並べられた。「あなたが同性の友人とつきあうときの気持ちや考えにどの程度あてはまりますか」という教示のもと, 1「まったくあてはまらない」, 2「あまりあてはまらない」, 3「どちらともいえない」, 4「ややあてはまる」, 5「とてもあてはまる」の5件法で回答を求めた。

(2) **友人関係満足度項目**: 豊田(2004)の友人関係満足度項目8項目を使用した。「同性の友人とのつきあいにおいて, 以下の項目は普段のあなたの気持ちにどの程度あてはまりますか」という教示のもと, (1) 被異質視不安項目・異質拒否傾向項目と同様の選択肢で回答を求めた。

### 調査時期

2008年6月から2009年1月に調査を実施した。

### 実施手続き及び倫理的配慮

調査は, 中学生や高校生では, 学級担任などが学級単位で集団で実施し, 大学生では講義時間の一部を使って, 著者が集団で実施した。いずれの場合も, 無記名であり, その場で回収した。また, 調査への協力は任意であること, 回答を拒否できることや回答を中断できることなどを紙面に明記し, 口頭でも伝えた。

## 結 果

### 被異質視不安項目・異質拒否傾向項目の因子分析と得点化

まず, 中学生・高校生・大学生のデータを込みにして, 被異質視不安項目及び異質拒否傾向項目の平均及び標準偏差を算出したところ, 異質拒否傾向項目の22「趣味や好みが同じでなければ友だちにはなれないと思う」(平均1.94, 標準偏差1.00)において, 床効果がみられた。そこで, この項目を除き, 被異質視不安項目・異質拒否傾向項目あわせて24項目について, 因子数を2に指定して, 最尤法・promax回転による因子分析を行った。その結果, 第1因子には異質拒否傾向項目が, 第2因子には被異質視不安項目が, それぞれ高い負荷量を示した(Table 1)。そこで, 第1因子を「異質拒否傾向」, 第2因子を「被異質視不安」と命名した。2因子での説明可能な分散の割合の総和は43.6%であった。なお, 中学生・高校生・大学生別々に因子分析を行った結果, 同様の2因子が抽出された。

各因子に.60以上の負荷量を示した項目の $\alpha$ 係数を算出したところ, 「異質拒否傾向」が.91, 「被異質視不安」が.86と, 十分な内的一貫性が確認された。そこで, 各因子に.60以上の負荷量を示した項目の平均を算出し, それぞれ「異質拒否傾向」得点, 「被異質視不安」得点とした。

因子分析の結果, 「異質拒否傾向」と「被異質視不安」との間には, 正の因子間相関( $r=.44$ )がみられた。また, 「異質拒否傾向」得点と「被異質視不安」得点の間にも, 有意な正の相関( $r=.38$ )が確認された。

**友人関係満足度項目の主成分分析と得点化** 友人関係満足度項目8項目について, 主成分分析を行ったところ, 8項目すべてが第1成分に対して, 絶対値で.50以上の負荷量を示した(Table 2)。寄与率は48.9%であった。

逆転項目の回答を逆転処理して, 8項目の $\alpha$ 係数を算出したところ, .85と十分な内的一貫性が確認された。そこで, 8項目の平均を算出し, 友人関係満足度得点とした。

**Table 1** 被異質視不安項目・異質拒否傾向項目の因子パターン（最尤法・promax 回転後）及び各項目の平均（標準偏差）

| 項目内容                                  | F1   | F2   | $h^2$  | 平均(標準偏差)   |
|---------------------------------------|------|------|--------|------------|
| <b>第1因子「異質な存在を拒否する傾向」(異質拒否傾向)</b>     |      |      |        |            |
| 12B：自分とは違う考えをもっている友だちとはつきあいたくない       | .84  | -.04 | .67    | 2.19(1.03) |
| 25B：自分とは意見が違う友だちとは関わりたくない             | .77  | .05  | .63    | 2.23(1.00) |
| 11B：話題があわない友だちとは話したくない                | .75  | -.01 | .55    | 2.51(1.10) |
| 7B：意見があわない友だちとの関わりは避ける                | .74  | .00  | .56    | 2.69(1.11) |
| 16B：気があわない友だちとは一緒にいたくない               | .70  | -.03 | .47    | 2.84(1.20) |
| 21B：趣味や関心が違う友だちとは仲良くなろうとしない           | .68  | .01  | .46    | 2.27(1.02) |
| 2B：自分の考えとあわない友だちとはつきあいたくない            | .67  | -.11 | .40    | 2.96(1.17) |
| 15B：共通の話題がある友だちとだけ話したい                | .64  | .13  | .50    | 2.28(1.08) |
| 5B：自分と同じ価値観の友だちとだけつきあいたい              | .64  | .08  | .46    | 2.43(1.12) |
| 17B：自分と同じ考え方をもっている友だちだけがよいと思う         | .63  | .08  | .45    | 2.25(1.12) |
| 3B：気があわない友だちとは関わりたくない                 | .62  | -.14 | .33    | 3.34(1.17) |
| 18B：気があわない友だちからの誘いはどんなことでも断る          | .52  | .01  | .28    | 2.23(1.04) |
| <b>第2因子「異質な存在にみられることへの不安」(被異質視不安)</b> |      |      |        |            |
| 20A：できるだけ友だちと同じであろうと気をつけている           | -.02 | .78  | .60    | 2.48(1.09) |
| 23A：友だちから取り残されないように気をつけている            | -.01 | .76  | .57    | 2.70(1.18) |
| 19A：友だちから自分がどう見られているのか気にかかる           | -.11 | .70  | .43    | 3.18(1.26) |
| 6A：自分は友だちと同じかどうか気になる                  | .00  | .64  | .42    | 2.66(1.21) |
| 9A：友だちと違う意見を言うのが怖い                    | .05  | .64  | .44    | 2.22(1.10) |
| 24A：友だちと一緒にいないと不安になる                  | -.04 | .63  | .38    | 2.66(1.21) |
| 10A：友だちと同じでないと感じ落ち着かない                | .13  | .60  | .44    | 2.15(1.07) |
| 13A：友だちにはあわせなければならないと思う               | .05  | .59  | .37    | 2.40(1.13) |
| 14A：友だちに本音を言うのは緊張する                   | -.07 | .57  | .30    | 2.57(1.24) |
| 1A：友だちから浮いているように見られたくない               | -.11 | .57  | .28    | 3.31(1.20) |
| 4A：友だちから変わった人だと思われていないか不安になる          | .08  | .54  | .34    | 2.44(1.19) |
| 8A：友だちの前で目立つことはしたくない                  | .06  | .35  | .15    | 2.62(1.17) |
| 各因子に.60以上の負荷量を示した項目の $\alpha$ 係数      | .91  | .86  |        |            |
| 因子間相関                                 |      |      | .44    |            |
| 得点間相関                                 |      |      | .38*** |            |

注) 項目番号後のAは被異質視不安項目、Bは異質拒否傾向項目であることを、それぞれ意味している。

注) \*\*\* $p < .001$

**Table 2** 友人関係満足度項目の主成分分析結果及び各項目の平均（標準偏差）

|                                | 第1成分 | 平均(標準偏差)   |
|--------------------------------|------|------------|
| 1：今の自分の友だち関係に満足している            | .78  | 3.87(1.07) |
| 4：今の友だち関係は、自分にはあわないと思う※        | -.73 | 2.10(0.99) |
| 2：友だちとのつきあい方がうまくいっていると感じる      | .73  | 3.57(1.03) |
| 5：自分の友だち関係は今のままでいいと思う          | .71  | 3.64(1.10) |
| 8：友だちといるときの自分は、本当の自分ではない気がする※  | -.70 | 2.39(1.11) |
| 3：今の友だち関係は、私が望んでいたものと違っている※    | -.68 | 2.43(1.06) |
| 7：友だちといるときの自分は、自分らしい自分になれると感じる | .65  | 3.57(1.06) |
| 6：今の友だちづきあいは本当はつらいときがある※       | -.59 | 2.69(1.25) |
| 寄与率(%)                         | 48.9 |            |
| 8項目での $\alpha$ 係数              | .85  |            |

注) 項目後の※は逆転項目を意味する。

**Table 3** 「異質拒否傾向」得点, 「被異質視不安」得点, 友人関係満足度得点の2要因分散分析結果

| 対象者        |            |            |            | F 値 <sub>(df)</sub>        |                         |                           |
|------------|------------|------------|------------|----------------------------|-------------------------|---------------------------|
| 中学生(260名)  | 高校生(212名)  | 大学生(196名)  | 学校段階       | 性                          | 交互作用                    |                           |
| 「異質拒否傾向」得点 |            |            |            |                            |                         |                           |
| 男子(307名)   | 2.60(0.91) | 2.63(0.89) | 2.48(0.72) | 0.70 <sub>(2,662)</sub>    | 0.90 <sub>(1,662)</sub> | 0.23 <sub>(2,662)</sub>   |
| 女子(361名)   | 2.52(0.77) | 2.52(0.71) | 2.49(0.76) |                            |                         |                           |
| 「被異質視不安」得点 |            |            |            |                            |                         |                           |
| 男子(307名)   | 2.63(0.89) | 2.58(0.83) | 2.27(0.76) | 4.92 <sub>(2,662)</sub> ** | 2.44 <sub>(1,662)</sub> | 2.70 <sub>(2,662)</sub>   |
| 女子(361名)   | 2.73(0.92) | 2.49(0.77) | 2.58(0.83) |                            |                         |                           |
| 友人関係満足度得点  |            |            |            |                            |                         |                           |
| 男子(307名)   | 3.63(0.73) | 3.73(0.75) | 3.66(0.70) | 1.11 <sub>(2,662)</sub>    | 1.89 <sub>(1,662)</sub> | 4.25 <sub>(2,662)</sub> * |
| 女子(361名)   | 3.75(0.78) | 3.45(0.79) | 3.57(0.73) |                            |                         |                           |
|            |            |            |            | 女：中>高，高：男>女                |                         |                           |

注) \* $p < .05$  \*\* $p < .01$ 

**異質拒否傾向, 被異質視不安, 友人関係満足度の青年期における変化の検討** 青年期を通して異質拒否傾向, 被異質視不安, 友人関係満足度がどのように変化するかを検討するために, 「異質拒否傾向」得点, 「被異質視不安」得点, 友人関係満足度得点について, 学校段階(3)×性(2)の2要因分散分析を行った(Table 3)。その結果, 「異質拒否傾向」得点では, 学校段階の効果, 性の効果, 交互作用のすべてが有意ではなかった。「被異質視不安」得点では, 学校段階の効果が有意であった( $F_{(2,665)} = 4.34, p < .05$ )。多重比較(Tukey法・5%水準)の結果, 中学生が大学生よりも得点が高かった。友人関係満足度得点では, 交互作用が有意であった( $F_{(2,662)} = 4.25, p < .05$ )。単純主効果の検定(Bonferroni法・5%水準)を行った結果, 女子において, 中学生の方が高校生よりも得点が高く, また高校生において, 男子の方が女子よりも得点が高かった。

**被異質視不安及び異質拒否傾向と友人関係満足度との関連** 異質拒否傾向が被異質視不安を引き起こし, また異質拒否傾向は友人関係満足度に対し直接的, ある

いは被異質視不安を媒介にして間接的に, 関わっているという予測をもとに作成されたモデル(Figure 1)について, 構造方程式モデリングを用いたパス解析を行った。この際, 「被異質視不安」得点並びに友人関係満足度得点において男女差または学校段階差がみられたことから, 学校段階(3)×性(2)の6つの属性について, 多母集団同時分析を行った(Table 4)。

その結果, 中学生男子では, 「異質拒否傾向」得点から「被異質視不安」得点には有意な正の標準偏回帰係数( $\beta = .43, p < .001$ )が示されたが, 「異質拒否傾向」得点及び「被異質視不安」得点から友人関係満足度得点には, 有意な標準偏回帰係数は示されなかった。高校生男子では, 「異質拒否傾向」得点から友人関係満足度得点に有意な負の標準偏回帰係数( $\beta = -.30, p < .01$ )が示された。また, 中学生男子同様, 「異質拒否傾向」得点から「被異質視不安」得点には有意な正の標準偏回帰係数( $\beta = .38, p < .001$ )が示されたが, 「被異質視不安」得点から友人関係満足度得点へは有意な標準偏回帰係数は示されなかった。大学生男子では, 「異質拒否傾向」

**Table 4** 「異質拒否傾向」得点, 「被異質視不安」得点, 友人関係満足度得点の関連

| 学校段階・性 | ①「異質拒否傾向」得点<br>→「被異質視不安」得点 | ②「異質拒否傾向」得点<br>→友人関係満足度得点 | ③「被異質視不安」得点<br>→友人関係満足度得点 | 「被異質視不安」得点の<br>重相関係数の平方 | 友人関係満足度得点の<br>重相関係数の平方 |
|--------|----------------------------|---------------------------|---------------------------|-------------------------|------------------------|
| 中学生男子  | .43***                     | -.16                      | -.07                      | .19                     | .04                    |
| 中学生女子  | .40***                     | -.23*                     | -.04                      | .16                     | .06                    |
| 高校生男子  | .38***                     | -.30**                    | -.13                      | .14                     | .13                    |
| 高校生女子  | .28**                      | -.23*                     | -.35***                   | .08                     | .22                    |
| 大学生男子  | .19                        | .09                       | -.38**                    | .04                     | .14                    |
| 大学生女子  | .46***                     | -.36***                   | -.16                      | .21                     | .21                    |

注) \* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$ 

注) ①・②・③の値は標準偏回帰係数である。

注) モデル(Figure 1)は飽和モデルであるため, 適合度指標は算出されない。

得点からは友人関係満足度得点に対しても、「被異質視不安」得点に対しても有意な標準偏回帰係数は示されなかったが、「被異質視不安」得点から友人関係満足度得点に対して有意な負の標準偏回帰係数 ( $\beta = -.38, p < .01$ ) が示された。

中学生女子では、「異質拒否傾向」得点から友人関係満足度得点に有意な負の標準偏回帰係数 ( $\beta = -.23, p < .05$ ) が示され、また「被異質視不安」得点に対しても有意な正の標準偏回帰係数 ( $\beta = .40, p < .001$ ) が示された。しかし、「被異質視不安」得点から友人関係満足度得点に対しては有意な標準偏回帰係数は示されなかった。高校生女子では、「異質拒否傾向」得点から友人関係満足度得点に対して有意な負の標準偏回帰係数 ( $\beta = -.23, p < .05$ ) が示され、「被異質視不安」得点に対しても有意な正の標準偏回帰係数 ( $\beta = .28, p < .01$ ) が示され、さらに「被異質視不安」得点から友人関係満足度得点に対して有意な負の標準偏回帰係数 ( $\beta = -.35, p < .001$ ) が示された。大学生女子では、「異質拒否傾向」得点から友人関係満足度得点に有意な負の標準偏回帰係数 ( $\beta = -.36, p < .001$ ) が示された。また、「異質拒否傾向」得点から「被異質視不安」得点に対して有意な正の標準偏回帰係数 ( $\beta = .46, p < .001$ ) が示された。

## 考 察

**被異質視不安と異質拒否傾向の青年期における変化**  
本研究では、青年期の友人関係における異質な存在としてみられることに対する不安(被異質視不安)と、それを引き起こす心性としての異質な存在を拒否する傾向(異質拒否傾向)について、青年期における変化や友人関係満足度との関連を検討することを目的とした。

まず、定義をもとに作成した被異質視不安項目と異質拒否傾向項目を用いた調査を実施し、因子分析を行った。その結果、「異質拒否傾向」と「被異質視不安」という2因子が抽出された。この2つの因子間相関は正の値を示し、得点間相関も正の値を示しており、相互に関連した心性であることが明らかとなった。

次に、異質拒否傾向、被異質視不安、友人関係満足度の青年期における変化について検討した結果、「被異質視不安」得点については中学生と大学生の間で有意な差がみられ、被異質視不安は青年期を通して低下していく傾向がみられた。一方、「異質拒否傾向」得点については有意な差はみられなかった。既述のように、異質拒否傾向は青年期の自己中心性を通して、被異質視不安を引き起こしていると推測される。しかし、El-kind & Bowen (1979) は青年期の自己中心性は前期か

ら後期に移るにつれて減少することを明らかにし、また、Jahnke & Blanchard-Fields (1993) は、青年期の自己中心性は青年期前期の特徴であると述べている。これらの結果から、青年期を通して異質拒否傾向は変化せずもち続けているが、自己中心性が減少するに伴って、友人も自分と同程度の異質拒否傾向をもっているという推論をしなくなり、それによって、被異質視不安が低減したと考えられる。

なお、友人関係満足度についても青年期における変化を検討した結果、学校段階と性の交互作用が有意であり、女子において中学生よりも高校生の方が低く、高校生において男子よりも女子の方が低かった。天野(1975)や保坂(1993)は、高校生女子における集团的友人関係の特徴やそれに伴う困難について指摘している。また佐藤(1995)は、高校生女子はグループに入っていないと高校生活に不便や不都合が生じるため、防衛的な目的でグループに所属していると論じている。このように高校生女子の友人関係は消極的・防衛的な関係であり、そのため、友人関係満足度が中学生女子や高校生男子よりも低くなったと考えられる。

**異質拒否傾向と被異質視不安が友人関係満足度に及ぼす影響** 被異質視不安は友人関係満足度に直接的に影響し、異質拒否傾向は友人関係満足度に直接的に影響を及ぼすとともに、被異質視不安を媒介として間接的にも影響を及ぼすという予測に基づいて、異質拒否傾向及び被異質視不安と友人関係満足度との関連を、モデルを検証する形で検討した。その結果、異質拒否傾向から友人関係満足度への影響については、中学生男子及び大学生男子を除いた4つの学校段階・性において、有意な負の標準偏回帰係数が示された。つまり、中学生男子及び大学生男子以外では、異質拒否傾向をもっていると友人関係満足度が低下することが示された。また、異質拒否傾向から被異質視不安への影響についても、大学生男子を除いた5つの学校段階・性において、有意な正の標準偏回帰係数が示された。大学生男子以外では、異質拒否傾向が被異質視不安を引き起こしていることが明らかとなった。さらに、高校生女子と大学生男子で、被異質視不安から友人関係満足度への有意な負の標準偏回帰係数が示された。高校生女子及び大学生男子では、被異質視不安が高いと友人関係満足度が低下することが明らかとなり、高校生女子では、異質拒否傾向が被異質視不安を媒介として友人関係満足度を低めていることが示された。

男女別に結果をみると、女子においては、中学生では友人関係満足度に対して異質拒否傾向からの直接的

な影響しかみられないのに対し、高校生では異質拒否傾向からの直接的な影響だけではなく、被異質視不安を媒介とした間接的な影響も示されている。しかし、大学生では、中学生同様、異質拒否傾向からの直接的な影響しか示されなかった。この結果も、高校生女子の友人関係の困難さに関する天野 (1975) や保坂 (1993) などの指摘と一致したものであると考えられる。

男子では、中学生は異質拒否傾向も被異質視不安も友人関係満足度とは関連が示されなかったが、高校生では、異質拒否傾向は友人関係満足度を低め、被異質視不安を高めていたが、被異質視不安と友人関係満足度との関連は示されなかった。一方、大学生では異質拒否傾向と被異質視不安及び友人関係満足度との関連は示されず、被異質視不安が友人関係満足度を低めていることが示された。

榎本 (2003) は、高校生の時期が同質性を重視した友人関係から異質性を重視した友人関係へと移行する時期であると述べている。女子においては、中学生、高校生、大学生のいずれにおいても異質拒否傾向から被異質視不安及び友人関係満足度への有意な標準偏回帰係数が共通してみられている。しかし高校生女子ではこれらの標準偏回帰係数に加え、被異質視不安から友人関係満足度への有意な負の標準偏回帰係数が示され、この点が女子における同質性を重視した友人関係から異質性を重視した友人関係への移行期の特徴であると考えられる。榎本 (2003) は、この同質性重視の関係から異質性重視の関係への移行期には、“独特文化の中で他者を入れない絆で自分と友人との関係を深めていくことが特徴”である閉鎖的活動を中心とした友人関係が作られるとしている。しかし、天野 (1975) は、高校生女子がそのような閉鎖的な集団的友人関係 (グループ) を“あまりいいものではないがやむを得ない”と否定的に評価していることを報告している。このような高校生女子特有の閉鎖的な友人関係のあり方が背景となって、高校生女子では、異質拒否傾向が友人関係満足度に関わるという青年期女子に共通してみられる特徴だけではなく、被異質視不安も友人関係満足度を低めているという特徴がみられたと考えられる。一方、中学生女子と大学生女子では、異質拒否傾向が被異質視不安及び友人関係満足度と関わっているという点で共通しており、同質性を重視した友人関係であるとされる中学生と異質性を重視した友人関係であるとされる大学生には明確な違いがみられなかった。ここから、中学生女子と大学生女子の間の質的な違いは、異質拒否傾向、被異質視不安、友人関係満足度の三者関係か

らでは十分に把握できない可能性が考えられる。杉浦 (2000) では「拒否不安」と「親和傾向」という2つの親和動機と、対人的疎外感及び自我同一性混乱との関連を検討し、2つの親和動機と対人的疎外感との関連の仕方は中学生女子も大学生女子も同じであったが、自我同一性混乱との関連では、中学生女子は「親和傾向」と自我同一性混乱との間に負の相関がみられたのに対し、大学生女子では「拒否不安」と自我同一性混乱との間に正の相関がみられている。ここから、自我同一性のような人格発達の変数が、中学生女子と大学生女子の間の友人関係の質的な違いを把握する上で必要ではないかと考えられる。

男子では、異質拒否傾向、被異質視不安、友人関係満足度の三者関係が、中学生、高校生、大学生で異なっていた。中学生男子では、異質拒否傾向は被異質視不安を高めるが、異質拒否傾向も被異質視不安も友人関係満足度とは関連を示さなかった。榎本 (2003) は、中学生男子が「共有活動」を中心とした同等・同質性を重視した友人関係であると論じている。一方で、杉浦 (2000) は中学生男子が女子に比べ拒否不安が弱く、また重回帰分析の結果、2つの親和動機のいずれも対人的疎外感に影響を及ぼさないことを明らかにしている。これらから、中学生男子は、異質拒否傾向や被異質視不安のような心性をもっていたとしても、友だちと同じ活動をしている限りにおいては、友人関係満足度には影響を及ぼさないと考えられる。高校生男子では、異質拒否傾向が被異質視不安を高め、また友人関係満足度を低める要因となっていた。男子においても高校生の時期は、同質性を重視した友人関係から異質性を重視した友人関係への移行期であるとされている (榎本, 2003)。高校生の時期は、独自性が芽生え、自分なりの価値観が構築されつつある時期であるが、その分、自分の考えや価値観が不安定になる時期でもある。このような時期に自分と異なる考えや価値観をもつ者と関わることは、高校生に不安や動揺を与える可能性がある。そのため、高校生男子においては、異質拒否傾向が意識化され、友人関係満足度に影響を与えていると考えられる。そして、大学生男子においては、ある程度確立された自分の考えや価値観が、他者に受け入れられるかが問題となるため、被異質視不安が友人関係満足度に関わるようになって考えられる。これらから、男子における異質拒否傾向、被異質視不安、友人関係満足度の三者関係の変化にも、人格発達の変数が関わっている可能性が考えられる。

**まとめと今後の課題** 本研究は、青年の友人関係にお



ける被異質視不安と異質拒否傾向という2つの心性について、青年期における変化や、被異質視不安と異質拒否傾向が友人関係満足度に及ぼす影響について検討した。その結果、被異質視不安は中学生から大学生にかけて低下する傾向がみられ、友人関係満足度は高校生女子で最も低かった。友人関係満足度への影響については、中学生男子と大学生男子を除いて異質拒否傾向が友人関係満足度を直接的に低めていることが示された。また、大学生男子を除いて異質拒否傾向は被異質視不安を引き起こし、高校生女子では、異質拒否傾向が被異質視不安を媒介として友人関係満足度を低めていることも明らかとなった。これらの結果はこれまでの友人関係研究の結果からみても妥当な結果であり、青年期の友人関係を異質性という観点から把握することが可能であることを示していると考えられる。一方で、異質拒否傾向、被異質視不安、友人関係満足度の三者関係の青年期における変化を把握するためには、人格発達の変数を含めて検討する必要性も示唆された。この点が、今後の課題のひとつとして挙げられる。

本研究で作成した異質拒否傾向項目や被異質視不安項目の妥当性検討は十分ではない。これらの項目の作成にあたり、内容的妥当性の検討が行われ、また因子分析の結果、明確に2因子が抽出されたことから、因子的妥当性も有していると考えられる。しかし、被異質視不安は表面的な友人関係に関する論究から導出された概念であるが、本研究では表面的な友人関係に関わる変数との関連を検討していないため、構成概念妥当性の検討は不十分である。今後は、表面的な友人関係に関わる変数との関連を検討することで、更なる妥当性の検討を行っていかねばならない。

また、本研究では、被異質視不安や異質拒否傾向、友人関係満足度の青年期における変化を検討するため、中学生、高校生、大学生の比較を行った。中学校や高校は、その該当年齢のほとんどの青年が所属しており、学級という単位での活動が一般的であるが、大学はその該当年齢の約半数しか所属せず、また学級という集団単位がないという点で、中学校や高校とは異なる。学力水準についても、本研究で対象となった中学生、高校生、大学生において等質性が保たれているとは言えず、既述のように、人格発達の要因が被異質視不安や異質拒否傾向、友人関係満足度に関わっている可能性も示唆された。以上のような背景や要因を考慮した上で、本研究の結果について改めて検討する必要があると考える。

本研究でも、これまで指摘されてきたように、高校

生女子における友人関係の困難さが推察された。そして、この困難さ(満足度の低さ)には異質拒否傾向と被異質視不安の両方が関わっていることも示された。これは、高校生女子における閉鎖的友人関係の特徴やそれに伴う困難さを、異質拒否傾向や被異質視不安の観点から理解することができることを示唆していると考えられる。高校生女子の友人関係において、異質拒否傾向と被異質視不安がどのように寄与しているかについても、今後更なる検討が必要である。

さらに、異質拒否傾向については、集団において異質性をもつ者がいじめの対象となっているという深谷(1986)の指摘など、いじめ研究において論じられてきた異質者排除意識(井上・戸田・中松, 1986)と類似した心性であると考えられる。本研究では、異質拒否傾向が被異質視不安を媒介として友人関係満足度を低めていることが明らかとなったが、今後、異質拒否傾向といじめとの関連を検討することにより、これらの概念の有効性をさらに示すことができると考える。

## 引用文献

- 天野隆雄 (1975). 女子生徒の心理とその教育 早稲田大学出版部
- Brown, B. B. (1982). The extent and effects of peer pressure among high school student : A retrospective analysis. *Journal of Youth and Adolescence*, 11, 121-133.
- Elkind, D. (1967). Egocentrism in adolescence. *Child Development*, 38, 1025-1034.
- Elkind, D., & Bowen, R. (1979). Imaginary audience behaviour in child and adolescents. *Developmental Psychology*, 15, 38-44.
- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, 47, 180-190. (Enomoto, J. (1999). Socio-emotional development of friendship among adolescents : Activities with friends and the feeling for friends. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 47, 180-190.)
- 榎本淳子 (2003). 青年期の友人関係の発達的变化—友人関係における活動・感情・欲求と適応— 風間書房
- 深谷和子 (1986). 「いじめ」—ギャング・エイジの異形の姿— 現代のエスプリ, 228, 5-18.
- 保坂一巳 (1993). 中学・高校のスクール・カウンセラーの在り方について—私立女子校での経験を振り



- 返って— 東京大学教育学部心理教育相談室紀要, 15, 65-76.
- 保坂 亨 (1998). 児童期・思春期の発達 下村晴彦 (編) 教育心理学II 発達と臨床援助の心理学 (pp.103-123) 東京大学出版会
- 保坂 亨・岡村達也 (1986). キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討 心理臨床学研究, 4, 15-26. (Hosaka, T., & Okamura, T. (1986). Developmental and therapeutic implications in campus encounter group. *Journal of Japanese Clinical Psychology*, 4, 15-26.)
- 井上健治・戸田有一・中松雅利 (1986). いじめにおける役割 東京大学教育学部紀要, 26, 89-106. (Inoue, K., Toda, Y., & Nakamatsu, M. (1986). The roles on bullying. *Bulletin of the Faculty of Education, the University of Tokyo*, 26, 89-106.)
- 石川茜恵 (2008). 大学生の友だちとのつきあい方と自己受容からみた友人関係への満足度 日本青年心理学会第16回大会発表論文集, 78-79.
- Jahnke, H. C., & Blanchard-Fields, F. (1993). A test of two models of adolescent egocentrism. *Journal of Youth and Adolescence*, 22, 313-326.
- 栗原 彬 (1996). やさしさの存在証明 増補新版新曜社
- 松井 豊 (1996). 親離れから異性との親密な関係の成立まで 斎藤誠一(編) 青年期の人間関係 (pp. 19-54) 培風館
- 野田陽子 (1999). 青少年の友人関係とその変化 青少年問題, 46(9), 36-41.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究, 44, 55-65. (Ochiai, Y., & Satoh, Y. (1996). The developmental change of friendship in adolescence. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 44, 55-65.)
- 岡田 努 (2007). 現代青年の心理学 世界思想社
- 岡村達也・加藤美智子・八巻甲一 (編) (1995). 思春期の心理臨床—学校現場に学ぶ「居場所」づくり— 日本評論社
- 佐藤有耕 (1995). 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析 神戸大学発達科学部研究紀要, 44, 11-20. (Satoh, Y. (1995). An analysis of the reasons why high school female students tend to belong to classroom informal groups. *Bulletin of the Faculty of Human Development, Kobe University*, 44, 11-20.)
- 千石 保 (1991). 「まじめ」の崩壊—平成日本の若者たち— サイマル出版会
- 総務庁青少年対策本部 (1999). 非行原因に関する総合的研究調査 総務庁青少年対策本部
- 杉浦 健 (2000). 2つの親和動機と対人的疎外感との関連—その発達の变化— 教育心理学研究, 48, 352-360. (Sugiura, T. (2000). Developmental change in the relation between two affiliation motives and interpersonal alienation. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 48, 352-360.)
- 高田昭彦 (1989). 現代青年の政治意識 H. カスタニエダ・長島 正 (編) ライフサイクルと人間の意識 (pp.163-180) 金子書房
- 東京都生活文化局 (1985). 大都市青少年の人間関係に関する調査—対人関係の希薄化の問題との関連からみた分析— 東京都青少年問題調査報告書
- 豊田瀬理乃 (2004). 対人関係上の信念の変化からみた友人関係の分析 平成15年度筑波大学人間学類卒業論文 (未公開)
- 上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 護 (1994). 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, 42, 21-28. (Ueno, Y., Kamise, Y., Matsui, Y., & Fukutomi, M. (1994). Conformity and psychological distance in adolescent friendship. *Japanese Journal of Educational Psychology*, 42, 21-28.)
- 渡部玲二郎・佐々木葉子 (1996). 児童における自己開示と友人関係の満足度について—親密度と自己開示の質からの検討— 日本教育心理学会第38回総会発表論文集, 327.

(2009.3.12 受稿, '10.3.20 受理)

## *Adolescents' Anxieties About Being Thought Different From Others and the Tendency Toward Uniformity in Their Friendship Groups*

YASUMASA KOSAKA (WAKO UNIVERSITY) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2010, 58, 338—347

The present study investigated developmental changes in adolescents' and young adults' anxiety about being regarded as different and their tendency toward uniformity in their friendship groups, as well as the relationships among satisfaction with friends, anxieties about being regarded as different, and the tendency toward uniformity in friendship groups. The participants (260 junior high school students, average age 13.7 years ; 212 senior high school students, average age 16.2 years ; and 196 university students, average age, 20.2 years) completed a questionnaire about their anxieties about being regarded as different, the tendency toward uniformity in their friendship groups, and their satisfaction with their friendships. An analysis of variance did not reveal any developmental change in the youths' tendencies toward uniformity in their friendship groups, but did indicate that anxieties about being thought different from others decreased with increasing age. In the female participants and those male participants who were senior high school students, a tendency toward uniformity in their friendship groups was associated with lower satisfaction with their friendships. In all the groups of participants except for the male university students, a tendency toward uniformity in their friendship groups was associated with increased anxieties about being regarded as different. In the female senior high school students and the male university students, anxieties about being regarded as different were associated with lower satisfaction with their friendships.

Key Words : anxieties about being regarded as different, tendency toward uniformity in friendship groups, friendship, adolescents, young adults